

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月 8日現在

機関番号：15201

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520704

研究課題名（和文）戦国大名の港町支配に関する研究

研究課題名（英文） A Study on Rule of Port towns by Sengoku Daimyo

研究代表者

長谷川 博史（HASEGAWA HIROSHI）

島根大学・教育学部・教授

研究者番号：20263642

研究成果の概要（和文）：尾道・明石・白潟・安来・杵築およびその他の諸港湾を主対象として、それぞれの内部構造を明らかにするとともに、それらと戦国期権力との関係性について検討した。また、西日本海を主対象として、中世を通じた広域的な交流や日常的な流通の拡大をふまえて、港町とその後背地域の発展や変化について検討し、戦国大名と港町との関係性や、戦国大名が港町を掌握することの意味について、明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In this study, I clarified the relations with Sengoku Daimyo and port towns. At first, I examined internal structure of port towns, Onomichi, Akashi, Shirakata, Yasugi, Kizuki as an example. Then, I examined the relations between port towns. In the western Sea of Japan, the interchange between distant places became frequent, and the daily distribution was expanding, through the Middle Ages. Therefore, it was very difficult for Sengoku Daimyo to rule port towns.

交付決定額

（金額単位：円）

| | 直接経費 | 間接経費 | 合計 |
|--------|-----------|---------|-----------|
| 2009年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 2010年度 | 300,000 | 90,000 | 390,000 |
| 2011年度 | 500,000 | 150,000 | 650,000 |
| 年度 | | | |
| 年度 | | | |
| 総計 | 1,300,000 | 390,000 | 1,690,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：戦国大名・港町

1. 研究開始当初の背景

筆者は、これまで尼子氏・毛利氏の地域支配に関する研究を進める中で、出雲大社門前町など都市に関する問題を重要な素材として取り上げてきた（『戦国大名尼子氏の研究』2000年）。また、中世西日本海域の全体像を港の類型化をふまえて探る（「十六世紀における西日本海域の構造転換」〈矢田俊文・工藤清泰編『日本海域歴史大系 中世篇』2005年）とともに、海外の地図等に記載された地

名に注目することによって十六世紀の中国地方が港湾都市全盛の時代であった可能性を論じた（「日本地図から見た十六世紀の『中国地域』」〈岸田裕之編『中国地域と対外関係』2003年）ほか、個々の港町に関しても、備後国鞆の浦・尾道浦などを素材として近世初期に至る変容の実像に迫ろうとしてきた（『鞆の浦の歴史 福山市鞆町の伝統的町並みに関する調査研究報告書Ⅰ』1999年、『尾道の町並み 尾道市歴史的建造物及び町並

み調査』2009年)。その過程において、この時代特有の社会構造やその変容をとらえるためには、諸権力と港町との関係について、より全体的な検討が必要であると考えようになった。中でも、戦国大名と港町との関係は、大名領国の広域化の問題とも関わり、この時代を理解する最も重要な課題の一つではないかと考えられる。

戦国大名の都市支配の問題については、たとえば岸田裕之『大名領国の経済構造』(岩波書店、2001年)における赤間関など内海諸港をはじめとする地方都市支配の研究、秋山伸隆「戦国大名毛利氏の流通支配」(同著『戦国大名毛利氏の研究』1998年)の赤間関から美保関に至る港湾掌握に関する研究、本多博之「厳島門前町と住人構成」(『中国四国歴史学地理学協会年報』4、2008年)の厳島門前町の研究、天野忠幸「大阪湾の港湾都市と三好政権」(『都市文化研究』4、2004年)の兵庫津など大阪湾地域の研究などに代表されるように、たとえば大名権力が直轄城等に派遣・常駐させた代官・在番衆などによる直接的支配の事例や、あるいは一族の権益を配置する準直轄支配の事例、港町上層部の特権商人として掌握した事実などが紹介されており、都市支配の一環としての全体的特徴、あるいは個別の港町支配についての基本的な特徴は、すでにいくつも論じられてきている。しかし、都市史全般を論じた高谷知佳「比較中世都市論への視点」(『室町・戦国期研究を読みなおす』2007年)が指摘したように、実際の港町は、本質的に「開放性」と「閉鎖性」の矛盾を抱えた存在であり、特に「開放性」の際立つ戦国期の港町には、権力による支配を妨げる要因が次々に出現したと推測される。このことは、出雲大社門前町を事例としてすでに明らかにしたところであるが、そのような観点からこの時代の港町と諸権力との関係を全体としてとらえなおす必要があると考えるに至った。

2. 研究の目的

本研究は、戦国大名をはじめとする戦国期の諸権力と港町群の総体的な関係について、海域全体や後背地域における各港町の位置づけ及びその変化を明らかにしながら、大名領国規模の広域的な観点から解明しようとするものである。この問題は、戦国大名による急激な支配領域の拡大現象とも関わるものと推察され、戦国期権力の特質を明らかにする手がかりであるとともに、16世紀の世界史的な変動から日本列島社会がどのような影響を受け、近世へと転換していくのかを考察するために欠かすことのできないものであると考えられる。港町は、海域ネットワークの結節点であるとともに、内陸部と外海を結ぶ不可欠の拠点であるが、16世紀半ばの中

国やヨーロッパの文献に初めて現れる多数の表音表記の港湾都市名は、そのほとんどが瀬戸内海沿岸と山陰海岸に集中している。海外諸勢力によって認知されるほど新たな賑わいをみせた可能性があるこれらの港の後背地域では、東アジア交易圏における交流の深化によってもたらされた影響が、様々な形で表出していた可能性が高いと推測される。そのような地域において、戦国大名や海賊衆・有力領主をはじめとする諸権力が港町を掌握することには、他の時代とは異なる特有の意味があった可能性が高い。

そのため本研究においては、山陰海岸と瀬戸内海沿岸の港町を素材として、戦国期権力との関わりについて、各港町の相互関係や後背地域との結び付きをふまえた検討を行い、戦国期港町の変容に対する権力側の対応とその成否、またそのことが地域全体に及ぼした影響を明らかにすることを目的としている。

3. 研究の方法

本研究では、これまでの研究をふまえ、特に16世紀半ばに大きな変化の兆候が見られる中国地方周辺の港町群を対象として、この地域を治めた大内氏・尼子氏・毛利氏やその他諸権力との関係を明らかにすることにより、戦国期の港町固有の特質、あるいは日本列島社会や時代の転換において港町が果たした役割と意味についての解明を旨とした。そのために、以下のような手順で研究を進めた。

(1) 各港町の内部構造の検討

港町の問題を考えるためには、まず各港町の内部構造の検討が必要であり、具体的には、①町の空間構造とその変化を復元すること、②町を構成する社会の構造とその変化を解明すること、それらと諸権力との関係を再検討することが、本研究の一つの目的である。ただし、これについては検討対象地域のすべての港町について明らかにすることはおよそ不可能であり、研究史や史料が存在するいくつかの港町に絞って考察し、全体的な特徴を確認したいと考えた。

(2) 周辺地域・海域における港町の位置づけに関する検討

さらに、以上の点をふまえた上で、周辺地域・海域における港町の位置づけに関する検討を行う必要がある。具体的には、③後背地域との結び付きの実相とその変化を解明すること、④港町相互の関係など広域的な交流の様相とその変化を復元すること、そのそれぞれについて諸権力との関係を明らかにすること、である。これについても、③については、研究史や史料が存在するいくつかの港町に絞って考察し、④については、できるだけ全体的な視点から追究することを試みた。

4. 研究成果

(1) 各港町の内部構造の検討

①町の空間構造とその変化

尾道・明石・白潟・安来・杵築およびその他の諸港湾について、近世初期の史料などに基づき検討した。

14～15世紀頃に拠点的港湾都市が各地に形成されてくるまでは、群小港湾の中に、例外的に主要港湾が目立っているが、その主要港湾自体も、群小港湾機能の集積によってできている。広汎な海陸境界域は、権力によってとらえやすいものではなかった。14～15世紀以降の拠点的港湾都市は、それ自体が重層的に存在したが、大型構造船を着岸できるだけの港湾施設を持ち、周囲の港湾群と差別化される一方で、大規模な港湾都市の内部においては、なお多数の船着場が併存する構造を色濃く残していく。多くの港湾都市において、海岸線に直交する多数の街路が軸となっていたことは、そのためと思われる。16世紀は、そのような港湾都市群が最も繁栄した時期と言える。

17世紀以降の水上交通の拠点は、初期徳川政権下の各領主権力によって、さらに特定の港に限定され、その内部の船着場も特定の場所に収斂されていく。港町自体が、海岸線と並行する陸路を中軸とする大規模な町並みへ改編されていく傾向が強い。そうした政策は、権力的に推し進められたものではあっても、16世紀段階において拠点的港湾都市への物流の収斂が自生的に大規模に進行し、すでに発展を遂げていたことが、決定的な前提条件をなしていたとみるべきである。そして、権力的に推進されたものであるが故に、17世紀後半以降には物流実態との乖離が避けられなくなり、新たな航路整備を余儀なくされるのである。

②町を構成する社会の構造とその変化、諸権力との関係

尾道において、問丸がそれぞれ異なる取引先を有していたことは、多数の小路の先端がそれぞれ港湾機能を有して併存していた港の構造に対応するものであったと思われる。それが、戦国期を通じて変化を遂げ、笠岡屋小川氏・泉屋葛西氏に代表される大商人により、拡大した尾道浦全体を束ねる自律的組織基盤が作られた。このような大規模な商人たちは、大名権力間の抗争に巻き込まれながらも、海賊衆（とりわけ宇賀島衆や因島村上氏、さらには能島村上氏）を含めた多数の諸権力と関係を取り結び、16世紀末期を除けば、必ずしも大内氏・毛利氏など領域的地域権力のみにも帰属していたわけではないと推測される。

白潟では、15世紀末には自律的性格を持つ白潟衆が存在し、とりわけ尼子氏と強く結び

つきながら、島根半島中央部における基幹的港湾都市へ成長していった。それが、近世城下町松江の重要な前提をなした。

また、安来では、永禄年間には、秋上氏を介して「町役」が富田城にも納められていた。

杵築は、港湾都市というよりは港湾機能を併せ持つ門前町という方が正確であろうが、16世紀後半には出雲国西部を代表する都市として発展を遂げた。その過程においては、直接の領主である両国造家・上官家による支配を前提としながら、尼子氏・毛利氏も都市支配に介入していく。その目的は独自の領国支配の実現にあったと考えられるが、背景には16世紀半ばの変動による秩序の混乱があったと考えられる。それを示すのが、永禄元年（1558）の「杵築法度」（「千家家文書」）である。しかし、その内容は、現実を引き起こされている問題（盗難・喧嘩口論・大規模な闘争の頻発、神前御番の懈怠、牛馬の侵入、神官社役の懈怠、火事・延焼の発生、殺生禁断の緩み、国造への夫役拒否、下人訴訟の頻発、悪銭の蔓延、桝の混乱、敵討ちの横行）の存在を推測させるものではあっても、それに対する処断の法理に革新性が見られるわけではない。寛永2年（1624）検地帳にも示されたような、国造・上官・寺院等による複雑で入り組んだ支配の構造は、それ以前の権力による整序や改編が基本的には困難であったことをうかがわせている。港湾都市の変化の最大の要因が、権力側にあったとは言えないと考えられる。

(2) 周辺地域・海域における港町の位置づけに関する検討

③後背地域との結び付きの実相とその変化

14～15世紀頃、西日本海を介した交流は、島根半島を代表格とする内水面交通など、局地的流通との関わりを深めながら、日常的性格を強めていった。その過程において、群小港湾の中から新たに拠点的港湾都市が生み出されたが、たとえば杵築と出雲平野、白潟と意宇郡・島根郡・秋鹿郡周辺、安来と能義郡・伯耆国日野郡周辺などといったような、複数郡にまたがるような規模の後背地域とそれぞれ強いつながりを持っていた可能性がある。古益田湾の港湾群が国際貿易港として15世紀に全盛期を迎えるのは、後背地域にあたる益田川上流の丸山鉦山産出の銅が、重要な役割を果たしたからであると考えられる。

さらに、16世紀に出現した巨大都市石見銀山は、大量の消費物資や生産手段の需要を生み出し、温泉津・浜田のみならず、山陰海岸全体に大きな影響を及ぼし、従来にはなかった新規の遠隔地からの船舶を多数引き寄せた。石見銀山への求心性は、後背地としての側面を併せ持つ広大な地域を作り出したとも言えよう

④港町相互の関係など広域的な交流の様相とその変化、そのそれぞれについて諸権力との関係

14～15世紀の日常的交流・物流の拡大は、旧来以上に、物流を担う遠隔地間の人脈を緊密化させ、新たな流通関係を作り出していったと考えられる。拠点的港湾都市の形成は、その結果でもあり、促進要因でもあったと考えられる。その様相について、西日本海を事例として検討した。

また、16世紀後半の東アジア海域は、日常的な交流・物流の範囲がさらに拡大し、港湾都市相互の関係性がより多様化・広域化したと考えられる。とりわけ、鉄の流れにも触発され、また日常性を高めていた西日本海水運と内水面交通の結節点が集中していた島根半島周辺は、顕著な影響を受けた形跡がある。

内海上勢力の湯原氏や松浦氏の拠点が、内水面・外海の沿岸各地に点在していたり、杵築商人坪内氏の拠点が安来や石見銀山にもあったり、温泉津に長門国仙崎や同肥中の商人が拠点を持っていたりするような事例が、多数存在し、港湾都市間の経済的なむすびつきを実際に支えていたと考えられる。

権力が港を「掌握」するということは、一面では関税・船役・地銭徴収権などによる経済的収益であったと考えられる。特権商人が必要であった理由の一つである。しかし、港に生命を吹きこみ存立・発展を直接を支えたものは、港に基盤を持つ者たちの様々なネットワークだったのであり、それは本質的には外部権力の利害と対立する側面を内包し続けたと推測される。港が発展を遂げる局面では、権力側の保護などほとんど意味をなさない力を持った可能性が高い。16世紀後半には、新規の特権商人が出現しただけではなく、彼らとその基盤を維持することもきわめて困難な場合が、確かに存在した。

権力が港湾都市をとらえるということは、都市の秩序を維持する方向性を描いて成り立ちえない。しかし、既存の秩序維持のみに拠る限りでは、都市の発展は望めない。戦国大名権力による都市支配関係史料の少なさは、その矛盾の反映ではないかと思われる。言うまでもなく相論調停や治安維持は、領域的地域権力が社会から期待され要請される中心的な課題であるが、発展を遂げつつある都市ほど、その実現の難しい場所はなかった。

たとえば、天文21年(1552)2月28日陶晴賢厳島掟書写(「大願寺文書」)は、一般的には、厳島門前町における商業振興を目的とした革新的な内容と理解されてきているが、既存の秩序を打ち破る内容ではあっても、これで商業振興につながるのかは疑問である。第一ヶ条目に「当島見世屋敷事、当町人之外不可存知事」、第二ヶ条目に「諸廻舟、着岸舟留停止事」と記されていることは、新規参

入や外部勢力の進出を防ぐ方策に他ならないからである。

権力が港湾都市を重視したことは、単に税収の問題としてのみならず、港湾都市間の関係性を無視しえず、それぞれの後背地域社会をとらえる地域支配の要として、避けて通れなかったためと考えられる。その一方で、広域的な活動を展開させる勢力の増加に伴い、広域的な支配圏を持つ権力体の秩序規制に期待する側面が拡大したことをも推測させるものである。しかし、仮に「直轄領」であったとしても、その期待に応えることは容易ではなかった。

豊臣政権による朝鮮侵攻のための大動員は、そのような状況を一変させる威力を持っていた。しかし、軍需物資輸送に動員された大商人・船持層は、16世紀後半に広域的な活動や移動をすでに展開していた多くの人々の存在を前提にしている。近世城下町の港湾機能や、近世港湾都市の形成は、16世紀後半の新興大商人と諸権力が作り出した状況を前提とするものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計7件)

①長谷川博史, 渡邊大門『戦国期赤松氏の研究』, 日本歴史, 査読無, 762号, 2011, 110-112

②長谷川博史, 寛永二年杵築検地帳と杵築の歴史, 大社の史話, 査読無, 164号, 2010, 23-35

③長谷川博史, 中世港町安来の復元的考察, 社会科学研究, 査読無, 31号, 2010, 13-20

④長谷川博史, 鞆の浦埋立・架橋計画, 日本史研究, 査読無, 572号, 2010, 66-71

⑤長谷川博史, 毛利氏支配下における石見銀山の居住者たち, 池享編『中近世移行期における鉱山開発と地域社会の変容に関する研究』(科研基盤研究(B)報告書), 査読無, 2010, 524-545

⑥長谷川博史, 埋め立て架橋計画と鞆の浦, 芸備地方史研究, 査読有, 268・629号, 2010, 124-133

⑦長谷川博史, 港町の歴史的環境と伝説, 橋本政良編『環境歴史学の風景』(岩田書院), 査読無, 2010, 171-210

〔学会発表〕(計3件)

①長谷川博史，中世水運と松江，松江市史講座，2011年10月29日，松江市総合文化センター

②長谷川博史，毛利氏時代の出雲・石見地域，島根史学会大会記念講演，2010年12月18日，松江市労働会館

③長谷川博史，中世白潟と内海水運，島根県中世史研究会，2009年11月28日，松江市労働会館

6. 研究組織

(1) 研究代表者

長谷川 博史 (HASEGAWA HIROSHI)

島根大学・教育学部・教授

研究者番号：20263642